

学生・一般の部 暗誦課題文(日本文)

かめ  
司馬光が甕を割る話

司馬光が子どものころ、ある日友だちと庭で遊んでいました。庭には大きな水がめが置かれており、中には水がいっぱい入っていました。みんなが楽しく遊んでいると、一人の子どもが誤って水がめの中に落ちてしまいました。水は深く、とても危険な状況でした。ほかの子どもたちは驚いて泣き出し、どうしたらよいかわかりませんでした。大人を呼びに行く子もいれば、立ち尽くしてしまう子もいました。しかし、司馬光だけは落ち着いていました。彼はすぐに大きな石を持ち上げ、水がめに向かって力いっぱい投げつけました。すると水がめは割れ、中の水が流れ出し、落ちた子どもは助かりました。

みんなは司馬光の賢さと勇敢さをほめました。この物語は、「危険な時こそ慌てず、冷静に考えることが大切である」ということを教えています。



## 舟に刻みて剣を求む

昔、楚の国に、一人の男がいました。男は船に乗って川を渡っており、とても大切にしている宝剣を持っていました。船が川の真ん中まで来たとき、突然「ぼちゃん」と音を立てて、その宝剣が川に落ちてしまいました。船に乗っていた人たちは慌てて、「早く拾わないと！」と言いました。ところが、その男は少しも慌てず、小刀を取り出して船べりに印を刻みました。人々が「どうして印をつけるのですか」と尋ねると、男は「剣はここから落ちたのだから、船が岸に着いたら、この印の場所から川に入って探せばよい」と答えました。

やがて船が岸に着くと、男は本当に印をつけた場所から川に飛び込み、剣を探し始めました。しかし、いくら探しても剣は見つかりません。周りの人たちは笑いながら、「船はずっと進んでいるのに、剣は落ちた場所に沈んだままだ。船の印だけを頼りにしても見つかるはずがない」と言いました。

その後、「刻舟求剣」という言葉を、状況の変化に応じず、古いやり方に固執する人のたとえとして使うようになりました。

この物語は私たちに、物事に出会ったときには、柔軟に考えることを学ばなければならないと教えています。

